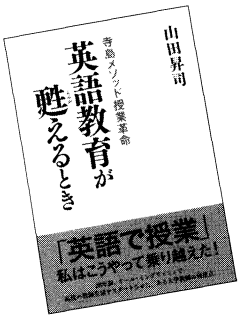

英語教育が甦えるとき

寺島メソッド授業革命

山田 昇司著（明石書店，2,700 円）

本書は，寺島隆吉氏の英語指導実践理念を自家薬籠中のものとした著者が，自身の教室で実践し，それが学習者の学びとして受け入れられ，彼らの英語への取り組みが変わっていく様子を克明に記述した実践記録である。

著者の実践過程からは興味深い幾つかの特徴が浮かび上ってくる。一つは「センマルセン」や「リズム読み」という，耳慣れぬ寺島氏の指導方法である。評者自身が経験したことはないので誤解の誹りを覚悟して言うならば，寺島メソッドは学習者を苦しめてきた学校文法の弊害を，ミニマムな文法と意味構造のテンプレートに置き換えることで，学習者自らの手で複雑な英文を切り分けていくことを可能にする指導法ではないかと思えた。さらに「リズム」という文法指導とは無縁のプロセスが組み合わされている。これはある意味で言えば，リズムが文の分節行為に深く関わっていることを念頭に置いたうえで，リズムをも利用した英文理解への「立ち向かい方」を示す。

心理言語学分野でも，イントネーションやリズムが母語習得において心内で形成される文法と深く関わっていることが取り上げられている。母語の文法概念はまず母親の語りかけの持つリズムを軸に発達するというものだ。

寺島メソッドは，文法を覚えるべき知識として教え，理屈の理解の上に意味を探ろうとする学校文法指導の呪縛から学習者を解放する挑戦なのかもしれない。著者の実践に見える第二の特徴は，学習者理解に基づいた教材開発である。著者は教材選びに妥協しない。英語力が低ければ内容的にも易しいものという短絡的な判断に堕することなく，あくまで知的好奇心に応じる所で学習者に挑み，それを口頭で表現することを目ざすことで，質の高い優れた英文を自らのものとするまで伴走する。

教えられるのではなく，できるようになることで学習者は自信を得，それが自己意識の変革に繋がっていく。成果とか効果を云々するのではなく，学習者に妥協することなく，同じ高さの目線で寄り添う姿勢そのものが本実践の柱であるように見えた。学習者の生活の質の変化を目指す教育は決して平坦でない。少なからぬ失敗において自己を内省することにやぶさかでなく，同時に個に目を向け続ける姿勢あってこその賜物であろう。

玉井 健
（たまい・けん　神戸市外国語大学）